

地域連携型親子体操教室におけるアクティブ・ラーニングの実践 Practice of the Active Learning at Parent-Child Exercise Classes of Regional Cooperation Type

鳥居 恵治* ・ 山下 晋* ・ 藤原 貴宏**
TORII Keiji, YAMASHITA Susumu, Fujiwara Takahiro

要 旨：

本研究は、岡崎女子短期大学の学生が岡崎市主催の健康講座（親子体操教室）に参加し、事後のアンケート調査から、アクティブ・ラーニングのあり方について検討した。その結果、学生の興味や関心が共通していることが「学生間の協働」を高めやすいと考えられたことから、アクティブ・ラーニングを導入する初期段階はゼミ形式の授業が有効であると示唆された。また、アクティブ・ラーニングを推進するには、学生の自主的な学習時間を確保したり、授業の詳細を分かりやすく明示したシラバスの作成、学内の学習支援センターや図書館などの部署と連携をとって、学習支援をするシステムが必要である。

Abstract

According to the questionnaire investigation by students of this university for the participants in a parent-child exercise class, because collaboration among students can be effective when they have common interest and concern, a seminar type class will facilitate the introduction of the active learning, and self-directed learning, an clear-cut syllabus and a learning support system with the Learning Support Center and library on the campus will promote the active learning.

キーワード：親子体操教室、運動遊び、学生、アクティブ・ラーニング

Keyword: Parent-child class, motional play, student, active learning

I. 諸言

中央教育審議会の「大学教育の質的転換（答申）」¹⁾において、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。」と指摘がされている。これは、従来の知識詰め込み型中心

の教育から、学びの意味を学生に分かりやすく理解させた上で、教員と学生が相互に知性を高めていく学生主体型の学士課程教育に換えていくことが重要であるとしている。

アクティブ・ラーニングとは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称で、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るものである。その形態は発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習のほか、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等多岐に

*岡崎女子短期大学幼児教育学科

**岡崎学園高等学校

わたる。

また、アクティブ・ラーニングが注目され、導入が急がれている理由について山地²⁾は「①学生側の要因として、基礎学力や学習技能が不十分でも大学に入れるため、座学中心では学習成果が見込めなくなり、中等教育までと同様に、学生個々の学習を促進するような働きかけが必要になったこと、②情報が多角的に生成され公開されている今日、教員が一定の知識体系をマイペースで伝授するという授業は適格的でなく、大量かつスピーディーな情報流通の中で学生に必要な学習をいかにマネジメントしていくかが問われていること、③高等教育の国際市場化に伴って大学教育に標準化と差別化の両方の圧力が高まっているうえ、学生たちはグローバル化した労働市場で競争しなければならないという困難に直面していること」をあげている。

子どもの体力及び運動能力の低下は問題視されて久しく、走、跳、投能力にかかわる測定項目は、体力水準が高かった昭和60年頃と比較すると、顕著に低い水準になっている。

そこで、筆者は幼児期から学童期における生活習慣と運動能力の関連や体力及び運動能力のスキル獲得について調査研究を行っており、子どもの運動嗜好性に関する因子は、きょうだいなど一緒に遊ぶ仲間の存在や父親の運動嗜好性の高さであること³⁾、継続的な運動指導が幼児期の運動能力発達に正の影響を及ぼす可能性が示されていること⁴⁾を報告してきた。

これらの得られた知見を活用し、岡崎女子短期大学（以下：本学）で1年次後期から2年次前期に開講している「子どもの研究Ⅰ・Ⅱ」（以下：ゼミ活動）では、本学の付属幼稚園（以下：付属幼稚園）における継続的な運動指導をはじめ、近隣の幼稚園での運動指導、市町村で行われている親子体操教室などに参加して能動的な学習を行っている。

アクティブ・ラーニングで成果を上げるためには、学生個々の学習を促進する働きかけが必要であるが、一般的な座学で行う講義形式の授業（一教員対多学生）では、学生個々に対し、十分に働きかけをすることが難しいと感じている。その点において、本学のゼミ活動では、通常の授業よりも学生数が少なく、ゼミの領域について比較的関心

が高い学生が集まっていることが多いことから、アクティブ・ラーニングが展開しやすいと思われる。

そこで、本研究では、幼児体育領域のゼミ活動（行政主催の健康講座での運動指導）を通して、学生のためとなるアクティブ・ラーニングのあり方について検討することを目的とした。

Ⅱ. 方法

①対象

対象は本学幼児教育学科の鳥居ゼミ及び山下ゼミに所属する40名の学生のうち、講座への参加を希望した12名とした。なお、参加した学生は講座前に「①アクティブ・ラーニングとは何か」、「②本講座の目的」について資料に基づき説明を受けた。

②健康講座（親子体操教室）の概要

健康講座は岡崎市保健部（健康増進課 健康増進班）が企画・立案した。幼児期・学童期から運動は楽しいと経験を積むことは、生涯にわたっての運動習慣の継続につながるため、運動が好きな子どもに育てるコツを親子で学ぶことを目的に、平成26年11月15日（土）本学の体育館で開催された。

第一部（13：30～14：30）は園児（年長児）とその保護者14組（28名）を、第二部（15：00～16：00）は小学生（1・2年生）とその保護者27組（54名）を対象にした。

講座の内容は表1のとおりであり、学生は環境構成、子どもに見本を見せたり、援助（声掛けや補助）を行ったりした。

表1：健康講座のプログラム内容

- | |
|-------------|
| ○親子遊び |
| ・足じゃんけん |
| ・おせんべい返し |
| ・手つなぎ逆上がり |
| ・木登り |
| ○タオルを使った遊び |
| ・タオル引き |
| ・背中合わせタオル取り |
| ・流星キャッチボール |
| ・しっぽ取り |
| ○サーキットあそび |

なかよし平均台
 マットのぼり
 トランポリン
 バーくぐり越え
 キャッチボール
 鉄棒（前回り、逆上がりなど）
 肋木のぼり
 ケンパ
 タイヤチューブわたり（これらを繰り返す）

*第一部、第二部とも同様なプログラムであり、その強度や難易度を変えて行った。

③アンケート調査

参加した保護者に対して、講座終了後にアンケートを行った。内容は家庭における運動の実施状況や運動嗜好性、講座に対する感想とし、本調査の趣旨を説明して、同意が得られた41名のアンケート結果を集計した。

参加した学生に対し、講座が終了して、後片付けが完了した後に、今講座に関して、5段階で回答をするアンケート調査を行った。

④統計解析

得られたアンケート結果から、各質問項目を集計し、各回答の関連を検討するために相関係数を求めた。なお、分析にはSPSS ver.18を用い、本研究における統計上の有意水準は5%とした。

Ⅲ. 結果及び考察

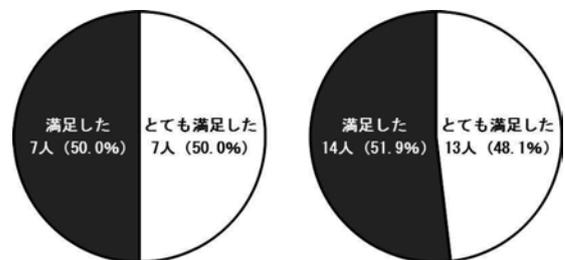
講座の内容に対する満足度は、保護者を対象にしたアンケート結果から、第一部に参加した保護者は「とても満足した（7名、50.0%）」、「満足した（7名、50.0%）」、第二部に参加した保護者から「とても満足した（13名、48.1%）」、「満足した（14名、51.9%）」であり、とても好評であった（図1、2）。

また、自由記述から、「今日のように、子どもと一緒に体を動かして遊ぶことをあまりしてなかったと感じた」、「楽しかった。親が2人とも運動嫌いなので、何とか運動する子になってほしい」、「普段は運動が苦手な子どもがとても楽しそうに体を動かしていた」（以上、第一部）、「普段やらないいろいろな運動が経験できた。子ども非常に楽しんでいた」「室内でゲームなどをして遊ぶこ



図1 健康講座の様子

上：親子でじゃんけんゲームをしている様子
 下：マットで作った壁を上る様子



第一部（年長児とその保護者） 第二部（小学1・2年生とその保護者）

*第一部、第二部とも「どちらともいえない」、「あまり満足でない」、「満足でない」という回答はなかった。

図2 親子講座に対する保護者の満足度

とが多く、体を動かして遊ぶことも少なかったもので、たくさん体を動かしてよかった。親子のコミュニケーションにもなった」、「子どもとの向き合い方を改めて考えさせられた」（以上、第二部）など、声が寄せられたことから、親子運動あそびは楽しいものであると感じてもらえたうえ、その必要性やあり方について理解してもらえたようであった。

満足度が高かった原因として、幼稚園や保育所、小学校よりも広い体育館で、日ごろ使わないトランポリンやタイヤチューブなどの器具や用具

を使うことができたこと、親子ペアで行う運動遊びの種目を多く行ったこと、さらに、その運動強度は各親子で設定することができるようにし、無理なく取り組むことができたこと、つまり、ハード面とソフト面の充実が挙げられる。また、本学の学生は、幼児体育の授業において、付属の幼稚園児を迎えて行う体育を行っているため、体育(体操)の指導や補助に関して、慣れていたと考えられる。さらに、鳥居ゼミ・山下ゼミの学生は付属幼稚園に行き、鉄棒や跳び箱、ボール遊びなどの指導を行っていることから、ほかの学生よりも経験が多く援助(補助や声かけ)ができる学生が多いことが原因と考えられた。

その他、「(今回の60分より、)時間を長くしてほしい」、「定期的に開催してほしい」という感想も多くあり、今後の講座あり方については、岡崎市保健部のスタッフと十分検討する必要があると感じた。

学生アンケートの結果を図3～10に示した。問1「『アクティブ・ラーニング』の趣旨を理解できましたか?」に対して、「とてもできた(4名、33.3%)」、「できた(7名、58.3%)」と多くの学生が理解をしていた。問2「事前に本講座の目的を把握することができましたか?」に対して、「とてもできた(3名、25.0%)」、「できた(9名、75.0%)」と全員が把握できていた。問1及び2に関して、理解度が高かったのは、講座の直前に説明をしたためであると考えられた。このことから「事前」の指導・説明に加え、「直前」に行うことの有効性が示された。

問3「運動遊びの環境構成に関わることができましたか?」には、「とてもできた(4名、33.3%)」、「できた(8名、66.6%)」と全員が積極的にかかわっていた。これは幼児体育の授業やゼミでの経験が生かされた結果であり、当日も器具や用具の配置場所に加え、安全を確保するための補助具(マットなど)の必要性など、各自が意見を出し合い取り組む様子が見られた。

また、問1～3の結果が「とてもできた」や「できた」と回答した学生が多かったもう1つの原因に、本学では学生が所属するゼミを選択しているケースが多いこともあげられる。今回は幼児体育という分野に興味を持ち、意識が高い学生が多く、学生の意識が共通しているため、アクティ

ブ・ラーニングにおいて重要である「学生間の協働」が機能したことが考えられる。このことから、アクティブ・ラーニングを導入する初期の段階ではクラス単位で行う授業よりもゼミの単位で行うほうが良いと思われた。

問4「力いっぱい遊びことができるように声掛けや援助ができましたか?」に対して、「とてもできた(3名、25.0%)」、「できた(5名、41.7%)」、「どちらともいえない(3名、25.0%)」、「あまりできなかった(1名、8.3%)」であった。問5「事故を予測し、安全に遊ぶことができるような補助ができましたか?」には、「とてもできた(2名、16.7%)」、「できた(5名、58.3%)」、「どちらともいえない(3名、25.0%)」と、今までの経験を十分に生かすことができない学生が目立った。学生アンケートから「最初はどのようにかかわっているのか分からなかった」、「あまりうまく声掛けができなかった」と感想が述べられた。この原因として、授業では子どものみを対象に運動指導を行っているが、今回は親子が対象であったことが考えられる。これはプログラムの内容の差ではなく、保護者がそばにいることによって、「恥づかしい」、「間違った声掛けをしたらどうなるか」など思ってしまい、声掛けや補助を躊躇してしまったと考えられることから、今後、より一層経験を積んで、声掛けや補助ができるように学んでほしいと感じた。

問6「保護者や子どもの運動特性を見つけ、説明ができるようになりましたか?」に対して、「できた(3名、16.7%)」、「どちらともいえない(5名、41.7%)」、「あまりできなかった(4名、33.3%)」であった。実際に学生が見つけた運動特性として、「傾斜にしたマットを上ることができる子どもは、足の指の付け根を使っている」や「キャッチボールの際、保護者や学生がしっかり手本を見せると、子どもがうまく投げることができた」があげられた。これらの動作は、学生が補助をした経験はあったが、その他の種目は、初めて経験するものばかりであったことから、多くの経験を積むことに加え、事前に各種目の運動特性を説明する必要があると思われた。

問7「次の講座に向けて、反省点や改善点を見つけ、説明できるようになりましたか?」には、「できた(7名、58.3%)」、「どちらともいえない(3名、25.0%)」、「あまりできなかった(2名、16.7%)」

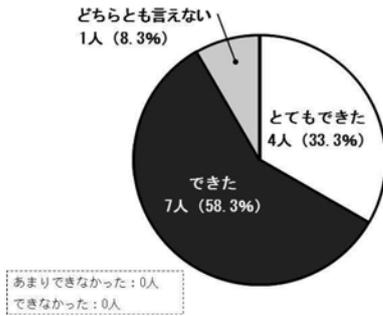


図3 (問1) 「アクティブラーニング」の趣旨を理解できましたか？

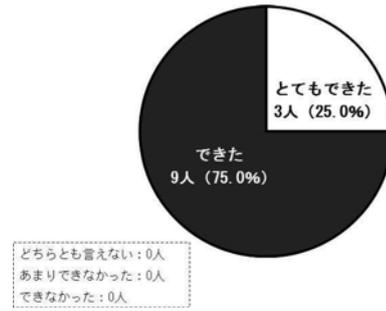


図4 (問2) 事前に本講座の目的を把握することができましたか？

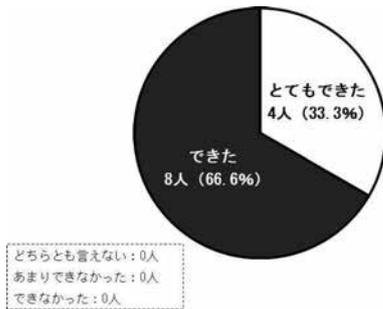


図5 (問3) 運動あそびの環境構成に関わることができましたか？

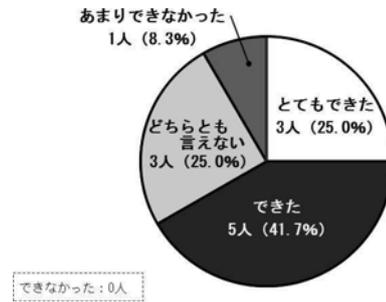


図6 (問4) 力いっぱい遊ぶことができるように声掛けや援助ができましたか？

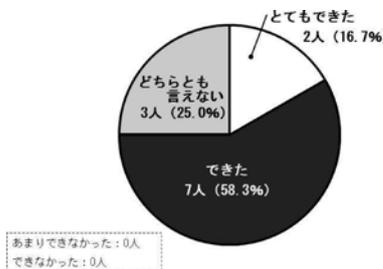


図7 (問5) 事故を予測し、安全に遊ぶことができるような補助ができましたか？

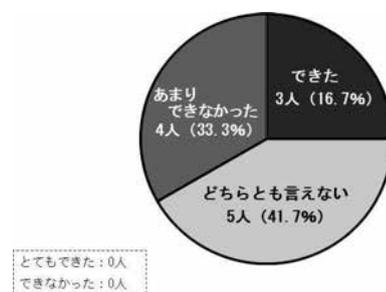


図8 (問6) 保護者や子どもの運動特性を見つけ、説明できるようになりましたか？

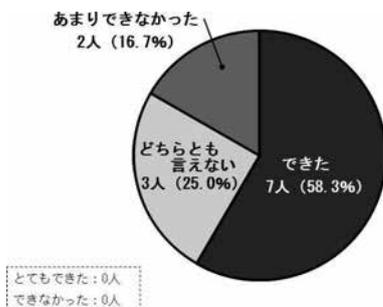


図9 (問7) 次の講座に向けて、反省点や改善点を見つけ、説明できるようになりましたか？

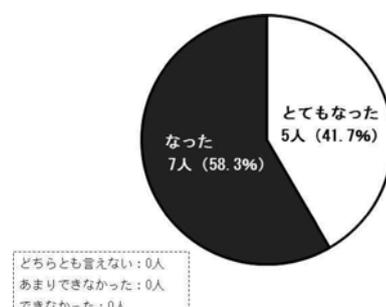


図10 (問8) この教室に参加して、知的に触発され、さらに深く学びたくなりましたか？

であった。できたと回答した学生は「子どもができないことがあったら、そのできない原因を見つけ、できるようにするための声掛けをしたい」と述べていた。

問8「この講座に参加して、知的に触発され、さらに深く学びましたか?」に対して、「とてもなった(5名、41.7%)」、「なった(7名、58.3%)」であった。今後もこのような講座を開催し、学生のより能動的な学習の場を提供していきたい。

表2に学生に対するアンケート項目の相関関係を示した。その結果、問1(アクティブ・ラーニングの理解)と問2(今講座の目的の把握)に強い相関が認められた($r=0.728, p<0.01$)。鳥居ゼミ・山下ゼミには合わせて41名の学生が所属しているが、今回は自由参加であり、そのうちより学びの意欲が高い学生が12名参加した。参加した学生は、幼児体育の領域では専門性の高い教員のもので刺激を受け、知的に成長したいと感じており、

表2 学生に対するアンケート項目の相関関係

		問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8
問1	アクティブ・ラーニングの理解		0.728**	0.594*	0.078	0.055	0.231	-0.231	0.497
問2	今講座の目的の把握			0.402	0.107	0.376	0.317	-0.570	0.293
問3	環境構成への関わり				0.131	0.092	0.078	-0.388	0.472
問4	声かけや援助					0.266	0.462	0.224	-0.031
問5	安全な補助						0.500	-0.272	0.110
問6	運動特性の発見							0.060	-0.130
問7	反省点・改善点の発見								-0.241
問8	知的な触発								

*下線は相関係数が0.400以上、または-0.400以下で、相関があることを示す。統計的有意差 **: $p<0.01$ *: $p<0.05$

能動的な学習の資質が備わっており、今講座の目的が何であるかを十分把握することができたものと考えられた。

問1と問3(環境構成への関わり)に相関が認められた($r=0.594, p<0.05$)。アクティブ・ラーニングの理解ができている学生は、自ら進んで環境構成への関わっていることが示された一方で、声掛けや援助、安全な補助との間には相関が見られなかった。子どもの研究Ⅰは後期(10月)から始まった科目であり、経験した種目(跳び箱や鉄棒など)に関しては指導や補助ができる学生がいるものの、初めて行った種目には十分に適応できなかった学生もいた可能性が考えられ、今後、経験を増すことによって声掛けや援助、安全な補助ができるようになることが期待される。

その他、問4(声掛けや援助)と問6(運動特性の発見)、問5(安全な補助)と問6の間にやや強い相関がみられた。これらのことから対象者により近い場所で声をかけ、その反応を観察することが幼児体育において重要な運動特性の発見につながることを示されたため、指導のポイントとしていきたい。

学生アンケートの自由記述には、「お父さん、お母さんと遊んでいる姿がとても楽しそうであった」、「直接子どもと関わって学ぶことができよかった」、「いろいろな能力の子どもがおり、勉強になった」、「また参加したい」と声が寄せられ、今講座への参加は有意義であったと感じていることから、できる限りアクティブ・ラーニングの機会を設けていこうと考えている。

一方で、本学において保育士資格、幼稚園教諭二種免許を取得するためには、履修する科目数が多く、日々の授業及び課題に加え、実習など時間的な点から必ずしも能動的な学修を推進できる環境とは言い難い。そこで、予習や復習を含む学生の自主的な学習時間を確保するシステムの導入が必要であろう。

また、学生が能動的に学ぶためには、各回のねらいや授業外の課題内容、評価方法などを分かりやすく明示したシラバスが必要である。さらに、アクティブ・ラーニングはそれを準備する教員の負担も多くなる。通常の授業に加え、就職・進路支援などの学生指導、委員会業務に追われているのが現状である。そのため本学にある学習支援センターや図書館、情報メディアセンターなどの部署と連携をとって、学習支援をする方法のほか、今後は授業にTA(Teaching Assistant)を活用するなど、学習支援機能を拡充させていく必要があると思われる。

IV. まとめ

本研究では、岡崎市が主催している親子講座において学生が能動的に学ぶ機会を設け、そのあり方について検討した。その結果、アクティブ・ラーニングの趣旨を理解している学生は講座の目的を把握したり、環境構成などへの関わりが積極的に行えることが示された。この要因として、学生間の興味や関心が共通していることが考えられたことから、アクティブ・ラーニングを導入する初

期段階はゼミ形式の授業が有効であると考えられた。また、アクティブ・ラーニングを推進するには、学生の自主的な学習時間を確保するシステム、授業の詳細を分かりやすく明示したシラバス、学内の学習支援センターや図書館などの部署と連携をとって、学習支援をするシステムが必要である。

引用参考文献

1) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）、中央教育審議会、

p9、2012

2) 山地弘起、特集 アクティブ・ラーニングとの実質化に向けて、JUICE Journal 2014年度 No.1、p3、2013

3) 山下晋、平野朋枝、浅川正堂、幼児の運動能力の伸びに関わる生活及び環境因子、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要第47号、p25-32、2014

4) 山下晋、平野朋枝、課外運動教室に参加する幼児の運動能力発達に関する縦断的研究、岐阜聖徳学園大学短期大学部研究紀要第44集、p103-109、2012